新著紹介

西洋美術史講話

文學士　矢代　幸雄氏著

日本に於ける西洋美術研究の價値に對して、今も時々耳にする否定的なる思想の大半は、藝術、學問の意味に關して之れを議するに十分なる程の考察を怠つてゐる人のみが安心して言へる種類のものに止まる樣であるが、唯一つ夫れが『複製』に基づくからと言ふ點に立脚するものゝみは、拒むことの出來ない確かさを持てゐる。複製が如何に精密であるにはしても、之れによつては到底原作に就て知りうることを知り盡すことは出來ない。實に齒痒いものであり、之れを通じた研究は、結局不十分である。だが、その結果が不十分である故に、その研究が、常に第二次的のもの、學的に威嚴なきものであると、多くの人の言ふに倣つて言ふならば夫れは亦大なる誤りである。複製を通じて原作の多くの『或るもの』を知ることが出來る。知り得るものは知るべきである。若し全體を知ることが出來ない故に美術史たる價値がないと言ふならば美術史なるものは恐らく永久に成立しないであらう。一つの作品は出來上つたと考へられた時以來、一日も休まずに『原作』としての性質を失ひ續けつゝあるからである。その作品が完成せられた瞬間と雖、誰れがその作品の『全部』を語り得る人であらう。況して一卷の美術史は、違つたペンを持ち、違つた眼鏡を懸けてゐる個人の書くものである。私は本書を通讀しつゝ私の考へた本書の著者の如き人が、よし複製を本にして著者自らの美術史を書いたにしても、夫れが將來　々なる邦人が一々原作を眺めて書くであらう所の西洋美術史の多くのものよりも必ず遜色あるものと成つたであらうとは夢にも想像することは出來ない。然し、用意の濃やかならんことを切に欲した著者は、未だ外遊の機會を待つ中に書く手引の本であるからと言つて、著者の欲する主觀的、創作的批評を差控へ、『第二次的の思索と綜合』に止めたと言ふ。西洋美術史の本流を希臘以後に求め、古典、中世、文藝復興期、近世、最近代の五期に分つて、三卷に收める爲に、本書即ち古代篇には、埃及以下の東方諸邦、希臘、エトルリア、羅馬を論じ、卷首に全體の總論たるべき、西洋美術の根本要素及推移の概觀を冠してゐる。思想は溫健であり、記述は簡潔であり、明快であり、全篇、美しき熱情に輝きつゝも、常に學的な眞率な態度によつて引締められてゐる。日本人の手に依て書かれた、系統的なる美術史の、人にも勇んで推奬することの出來る程のものが、之れによつて初めてさうして正に必要な時を撰んで出でたと言ふべきであらう。西洋美術の理解に對する一般の態度は今も尙ほ餘りに亂雜である。種々なる流派、種々なる天才の美術史上の正しき位置を知ることが、眞に彼等を知る爲に、必要であると言ふ樣なことさへ警告すべきでもあるかと思ふ程亂雜である。本書の發表は時もまた得たりと言ふべきである。改めて斷るまでもなく、私はこの本に於てゞも處々に、私の考へとしつくりは合はない點を幾らか注意することはした。例へば、第一篇の總說に於て西洋美術史の根本要素と、發達の大觀を論ずる個所は、殊に面白く讀んだ部分の一つであるが、茲に說かれる所に據ると、鬱鬱ならざる北歐の自然と、靈的

なる基督教精神の結合を意味するゴシック要素と、美しき南歐の自然と肉的に傾く希臘思想を含めた古典要素が互に影響し排斥して西洋美術史の幹流を爲す。北歐人はかの北方に住み、生存の必要上深く自然を注意する結果、藝術的快感を忘れても一毫の微も見逃さず、對象の分析的個性的眞を求め、之れが彼等の神秘的憧憬と合して氣味わるいとも深いとも言へる結合を爲す。この自然觀と神秘主義とに最も多く一致する基督教は北歐のゴシック藝術に於て最も純正に表はされてゐる。之れに對して美しき自然の裡に安らかに暮して自然以上を憧憬しない南歐人は深みよりも品のよさ、個性的眞よりも典型的美を求めると言ふ。この說は、著者自らも注意を與へられた樣に、先例のある考であり、之れに類した意見は隨分多いので、私自身も、西洋美術史の多くの部分をこの立場から說明することが出來るとは思ふ。同時に、然し、多くの偉大なる事實が、之れでは終に說明することが出來なくはないかとも思ふのである。唯だ試みに右に紹介した著者の論旨を頭に置てさうして南歐のしかも最も美しきエニスに於けるテイチアンテイントレツトオの、並びに、希臘クリイトに生まれ、ゼニスに學び、西班牙に住んだエル・グレコオの、ことに後者の(著者の思想で說くことの出來る半面の他面に橫る)深きもの、神秘なるもの繪畫史上の目覺ましき事實を說明することは六ヶ敷いやうに思ふ葡萄牙貴族の後裔として、西班牙に生れ、伊太利亞に學んだゼラスケスの、特にその初期の、古典的なる美に遠き對象を精寫する(近代繪畫に大いなる影響を及ぼす)銳き寫實主義も又同樣ではなからうか。ミケランゼロの偉大なる變體も。又北歐に於てはルウベンス、フランス・ハルス等の徹底的なる樂天的と、比類稀れなる官能の悅びも、彼等並にレムブラントの綜合的なる方式も、十七世紀の和蘭に榮ゐる、多くのジャンルも、――美術史上の大いなる事實の說明が十分出來ない樣である。言葉を換て曰へば、自然宗教その他の環境、その他の文化現象のみでは、到底說明することの出來ない、しかも極めて重大なるものが潛むのである。天才の獨創性がその環境と或る種の交涉を保ちつゝ働くからである。美術史發達の大勢を論じて基督教と美術の關係を說かれた所にも類似のことがある。歐洲中世の主潮たる基督教が次第に異教化し古典藝術に引付けられて靈肉併せ具へる人間本來の面目に復歸し、自然と自己の凝視に入つたのが文藝復興である。藝術に於ては寫實主義の確立である。結果は中世以來の宗教、宗教藝術の致命的變質と專制拋棄、やがて衰滅であつた。――こゝにも疑問が誘はれるが更に進んで、宗教改革が基督教に眞面目に同感する北歐に起つて新教の確立が獨逸な美術史上から長く影を潛めしめたと述べられてゐる。然し私は夫れ故に、獨逸教會改革の發生地たるヰツテンベルグに住んで、熱烈なプロテスタントであり『賢明なる』ザクセン選擧侯に寵用せられ、ルテル、メランヒトン等の肖像畫を畫きグリユウヲルド、デイウレル、ホルバイン、ハルドウング沒後の獨逸繪畫史を築くルカス・クラアナツハに絡はる意味を見逃すことは出來ないと思ふ。私はこれを補ふ種々の理由によつて、さうして特に新教國たる和蘭の美術を顧みつゝ獨逸美術史の寂寞は、若し外部的の事情に引付けて見れば教會改革にも、著者が但書にせられた三十年戰爭に本く國力の疲弊にも因るであらうが、然し

私は夫れよりも更に決定的なる理由は天才が出なかつたことだと思ふ。著者も言ふ樣に、當時はもはや宗敎のみが美術の唯一の需要者ではなくなつてゐた。さうして三十年戰爭の初まつたのは、デイウレル沒後約九十年の後である。著者は更に筆を接いで、南歐の羅馬舊敎は復興期精神を肯定し、藝術の誘惑性を道具に使つて宗敎の社會的隆盛を企圖し成功した。之れが卽ち南歐の反宗敎改革の運動であつて、肉體快樂の容認とそれの導く官能的幻境の尊重とを以て地上的には極めて目覺ましく活動した。ゼスイツト派が此運動の代表者であつて十七世紀の歐洲藝術は彼等の感覺要素の氣味惡い程に濃厚な宗敎藝術によつて殆ど風靡せられた樣がある。バロツク藝術の本質は夫れであると言ふ。然し私は、ゼスイツト派を代表者とする反敎會改革運動は、敎會改革に伴ひ若くば夫れ以後に起つた事件と見るべきであらうと思ふ。然るに、基督敎が宗敎弘通の方便として美術を利用し初めるのは、敎會改革などよりも遠き以前に—五世紀頃に既に初まることである。さうして夫れは言ふまでもなく南歐のみならず、廣く北歐の諸方にも擴がる事實である。更にバロツク藝術は、十七世紀の歐州美術の半面に過ぎないが、たしかに著者の言はれる樣に幻惑する程の色彩も、狂熱的な官能の追求も含まれてはゐるが、他面に特に多く殉敎者の怖ろしい受難を主題として流血、殺戮の激しい光景が、單に語られるのではなく、畫かれることを見なければならぬと思ふ。夫れはバロツクの繪畫が、好んで殉敎者を畫く、十五世紀のヲエデルランドの繪畫とからも區別せられる特質一つである。種々なる意味の激情が畫かれることにこそバロツク美術の主要なる相を見るべきであらう。基督敎を主題とするものは、しかもその一部なのである。注意すべきは激情を畫くと共に、多くが神秘的なることである。深き暗の世界に怪奇なる光が劇的の對比を爲して注ぐのはバロツク美術の重大なる一面である。美しき南歐の諸方にこの樣な美術が榮ゐたのである。さうして同時に、新敎國の和蘭に於ては深さを極めたる『奇蹟の畫家』レムブラントが現れるのである。

更にロココの美術に就ても私は著者の樣に、『珠貝の如く小さく美しく人爲的歡樂であり遊戲であつた。最近代の眞面目なる藝術はロココに對する反動として爆發する』と見てゐない。ワツトオ、シャルダンその他ロココの代表者の意味が十九世紀後半の繪畫史の重大なる一面として長く貫いてゐることを見逃してはならないと思ふ。十九世紀の美術に就ては、茲に一言することを差控へればならない程の喰ひ違ひがある樣に思ふ。

けれども之れは、言ふまでも無く、著者の思想が誤りであると言ふことを(一二の點は兎も角も)意味するのではない。同じ處を畫いてもAとBとの作品は必ず違ふものである。美術史は數學の課題を解くのではない。結局、研究の方向が違ふ處から自然に起る着眼點の相違にも歸着すべきであらう。私は以前から天才の獨創性若くば美術的意識の自律性に卽して美術史を研究する方向を取つてゐる。國土、宗敎—環境の側から美術史を說かれる著者の立場とその結果とを、私は多くの人と共に當然尊重する者である大小約四百五十面の、驚くべく豐富な、しかも一々精細な解說を持つ、浩翰なる圖錄を伴つて、出づべき時に期待に相應しくこの

如き著書が現れたことは、實に我思想界の大慶である。東京市神田區南神保町十六、岩波書店發行、古代篇及同圖錄。價九圓。(植田壽藏)

寄贈書籍雜誌

死の國々　石川縣　曉烏敏著

親鸞聖人論　同　香草舍發行

父の印象　同　上

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、日華公論、學校教育、教育、內外教育評論、教育學術界、教育研究、教育時論、